

近世密教法具の変容 大型五種鈴を中心とする大壇具について

末兼俊彦（京都国立博物館）

密教修法で設ける修法壇のうち、曼陀羅供や灌頂など重要な儀式で用いるのが大壇であり、大壇上に配置される密教法具一式を大壇具と呼称している。平安時代に空海・最澄とそれに続く多くの留学僧が唐より体系立った密教を請来して以降、彼らは教義と共に經典、図像をはじめとする大量の文物をもたらし、その中には密教固有の仏具である法具も含まれていた。これら法具の集大成である大壇莊嚴の出現時期に関しては既にいくつかの推論が提示されてはいるものの結論には至っていない。しかしながら、和歌山・青岸渡寺の周辺から出土した那智経塚出土仏教遺品など、現存する作例と記録から少なくとも平安時代の終わり頃には現在の構成と変わらぬ大壇莊嚴が存在したと見なせよう。その構成は12世紀以降定型化して真言宗・天台宗を中心に現在まで傳承されてきたが、本発表では、それら一般的な構成とは異なる「大型五種鈴を中心とする大壇具」について新発見の作例を紹介しつつ、既知の作品を対比させることで各々の出現と背景を考察する。

近世以降、一般的な大壇具とは別に大型五種鈴とその中でも塔鈴を超大型につくり、宝塔と兼用する特異な構成の大壇具が確認されている。これまでは滋賀・無動寺や、東京・寛永寺のものなど、天台宗、中でも法曼流に関係するものが紹介されてきたこと、無動寺大壇具の箱書に「覚大師将来形」とあったことから、この種の大壇具の発生を天台教学に求める向きが多かった。しかしながら近年、京都市内の泉涌寺、大通寺といった真言宗の寺院にも大型五種鈴を用いた大壇具の存在が確認されたことで、同様の大壇具の発端をどこに求めるか意見が分かれている。発表者はこの問題に新たな視座を加える作例として、前述の4例に先立つ重要作品である大阪・観心寺伝来の大壇具一式を発見した（「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究（16H01916）」）。観心寺大壇具が収められている漆塗箱外底には明和六年（1769）の墨書銘があり、製作年代が確かな作例として無動寺大壇具箱書の弘化三年（1846）を上回る最古の物となる。また、観心寺大壇具では施主名以外にも製作工房である鑄工・田中伊賀や仏師・清水隆慶（二代・1729～95）の参画が確認される点も重要であり、これまで不透明であった製作背景の一部が明らかとなった。

本品を既知の作例と比較することで大型五種鈴を用いた大壇具の発生が天台宗に先行して真言宗寺院で行われていた事実が判明するが、形状の似通った無動寺・泉涌寺・大通寺の3作例と観心寺大壇具はその外形や細部に類似点が少なく、発想を同じくしつつも完全な器形の継承関係にあるとは言えない。今回改めて3作品の調査を行ったところ、泉涌寺大壇具の一部に中世に遡る古作が混在し、同作の特徴が一連の大壇具にも見られることが判明したため、この古作を祖型として他の法具が製作された可能性を指摘する。